

團長若手、其用務凡、渡候キルモ、其ノ事、

且將來相當ノ養庶ヲ豫期シ、維キ北ナリテ以テ

本條伯ノ締結ニ必シトモ、同ノ業、北ニ依リ本業ハ

本

此儘可決セラシ然レハト思料ス

右様ノ審査ノ結果ヲ報告ス

大正七年十二月十六日

書記官長

議長

大正七年十一月廿一日

委員長

西

委員

西
島
高

大學令及高等學校令審査報告

委員名 表

滝尾久保

内務

委員

小松原

一

穂積

安廣

富井

秘

大學令及高等學校令審査報告

今回大學令、高等學校令其ノ他學制ニ關スル數件ノ御諮詢アリ本官等審査委員ノ命ヲ拜シ去ル九月二十三日以來數十回ニ互リテ委員會ヲ開キ屢國務大臣及當局諸官ノ出席ヲ求メ其ノ説明ヲ聽キ各員交、所見ヲ擺キ辯論ヲ盡シテ研討審査シ以テ其ノ周匝精覈ヲ期シタリ此等勅令ハ概ネ臨時教育會議ノ答申ヲ裁酌シ文部當局ニ於テ立案シタル所ニ係リ我國多年ノ宿案ヲ解決シ向來本邦教育ノ基礎ヲ為スヘキモノ

ニシテ寔ニ國家關要ノ法制ナリ殊ニ大學令及
高等學校令ニ於テ然リト為ス是レ本官等ノ特
ニ思フ潛メ慮ヲ殫シテ審査ノ闕漏ナカラムコ
トヲカメタル所以ニシテ今ヤ御諮詢ノ諸件中
右二者ニ付先ツ既ニ其ノ審査ヲ了シ本官等ノ
所見ヲ復申スルノ時機ニ達シタリ
先ツ前述二件内容ノ梗概ヲ列擧スルコト左ノ
如シ

第一 大學令

本令ハ今回新ニ制定スル大學制度ノ通則ニ

シテ其ノ要旨ハ左ノ諸點ニ在リ

(一) 目的

大學ハ國家ニ須要ナル學術ヲ教授シ及其
ノ蘊奧ヲ攻究スルヲ以テ目的トス(第一條)

(二) 組織

大學ハ綜合制ヲ常例トスルモ特ニ單科制
タルコトヲ許ス分科大學ノ種別ハ之ヲ限
定セス(第二條)

分科大學ニ研究科ヲ置キ綜合大學ニ於テ
ル各研究科ヲ綜合シテ大學院トス(第三條)

特別ノ必要アルトキハ大學ニ豫科ヲ附置
スルコトヲ得大學豫科ハ高等學校高等科
ノ程度ニ依リ高等普通教育ヲ為ス所トス

(第十一條)

(三) 設立

大學ハ官立公立及私立ノ三種トス(第四條)
公立大學ハ特別ノ必要アル場合ニ於テ北
海道及府縣ニ限り之ヲ設立スルコトヲ得

(第五條)

私立大學ハ必要ナル設備及基本財産ヲ有

スル財團法人ニ限り之ヲ設立スルコトヲ

得(第六條)

公立私立ノ大學ノ設立廢止ハ文部大臣ノ
認可ヲ要シ特ニ其ノ設立ノ認可ハ勅裁ヲ
請フヘキモハトス(第七條)

(四) 入學資格

分科大學ノ入學資格ハ當該大學豫科修了
者分科大學ノ種別ニ依リ高等學校文科若
ハ理科卒業者又ハ之ト同等以上ノ學力ア
ル者ニ限ル(第八條)

(五) 學士號

大學ニ在リテハ試験ヲ強制スルコトナキ
モ分科大学ニ一定年限在學シ試験ニ合格
シタル者ニハ學士ト稱スルヲ得シム(第九
條)

(六) 監督

公立私立ノ大學ハ文部大臣ノ直接監督ニ
屬ス(第十八條)

(七) 大學タル名稱ノ保留

本令ニ依ラサル學校ノ名稱ニ大學又ハ之

ニ類似スル文字ヲ用ウルコトヲ許サス(第
二十二條)唯現ニ大學又ハ大學類似ノ名稱
ヲ用アルモノニハ當分ノ内之ヲ許ス(附則
第三項)

(八) 施行期日

本令ハ大正八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(附則第一項)

其ノ他研究科ノ入學資格豫料ノ修業年限入
學資格及生徒定數業大學ノ學則公立私立ノ
大學ノ教員及監督方法ニ關シ必要ナル規定

ヲ設ク

本令ニ於テ特ニ著眼スヘキ事項ハ從來大學ノ制ハ帝國大學即チ官立綜合大學ニ限リタルヲ改メテ綜合大學ノ外新ニ單科大學ヲ認メ官立大學ノ外始メテ公立私立ノ大學ヲ許スコト是ナリ

第二 高等學校令

大學中學ノ間ニ在スヘキ學府ノ構成何如ハ我國學制上ノ最難問題ナリ明治二十七年制定ノ現行高等學校令ニ依レハ高等學校ハ

専門學科ヲ教授スルヲ以テ本體ト為シ特ニ大學豫科ヲ設クルヲ得ルニ過キサルモ實際ハ之ニ伴ハス其ノ本體漸ク没シテ專ラ大學豫科タルノ體制ヲ為スコト多年ナリ明治四十四年制定ノ高等中學校令ハ高等學校令ニ代ハルモノニシテ高等中學校ハ中學校卒業者ニ對シ更ニ精深ナル程度ニ於テ高等普通教育ヲ為ス所タルコトヲ定メタルモ未タ施行セラルルニ至ラサルナリ今回立案ノ高等學校令ハ現行高等學校令ト其ノ名稱ヲ同シ

ヲスルモ其ノ實質ハ相異ナル所多シ其ノ要
旨ハ左ノ諸點ニ在リ

(一) 目的

高等學校ハ男子ニ對シ精深ナル程度ニ於
テ高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス(第

一條)

(二) 設立

高等學校ハ官立、公立及私立ノ三種トス(第
二條)

公立高等學校ノ設立團體ハ北海道及府縣

ニ限ル(第三條)

私立高等學校ハ必要ナル設備及五十萬圓
以上ノ基本財産ヲ有スル財團法人ニ限リ
之ヲ設立スルコトヲ得(第四條)

公立私立ノ高等學校ノ設立廢止ハ文部大
臣ノ認可ヲ要ス(第五條)

(三) 組織及修業年限

高等學校ニハ修業年限三年ノ高等科及修
業年限四年ノ尋常科ヲ置キ通シテ七年制
タルヲ以テ本則ト為シ特ニ高等科ノミヲ

置クコトヲ得シム(第六條)

高等科ヲ分チテ文科及理科トス(第七條)

高等科ヲ卒リタル者ノ為ニ修業年限一年

ノ專攻科ヲ置クコトヲ得其ノ卒業者ニハ

高等學校學士ト稱スルヲ得シム(第八條)

尋常科アル高等學校ニハ豫科ヲ置クコト

ヲ得(第九條)

尋常科ハ中學校ノ課程ニ該當シ豫科ハ尋

常小學校ノ課程ニ該當スルモノトス

(四) 入學資格

尋常科ノ入學資格ハ當該學校豫科修了者

尋常小學校卒業者又ハ之ノ同等以上ノ學

カアル者ニ限リ(第十條)高等科ノ入學資格

ハ當該學校尋常科修了者中學校第四學年

修了者又ハ之ノ同等以上ノ學力アル者ニ

限ル(第十一條)

(五) 生徒定數及編制

生徒定數ハ高等科四百八十人以内尋常科

三百二十人以内トシ毎年高等科收容定數

ノ半數ヲ一般中學校出身者ニ供與ス又高

等科ノミヲ置クモノニ在リテハ生徒定數
ヲ六百人以内トス(第十二條)

各學級ハ同科同學年ノ生徒四十人以内ヲ
以テ之ヲ編制スヘキモノトス(第十三條)

(六) 監督

公立私立ノ高等學校ハ文部大臣ノ直接監
督ニ屬ス(第十八條)

(七) 高等學校タル名稱ノ保留

本令ニ依ラサル學校ノ名稱ニ高等學校又
ハ之ニ類似スル文字ヲ用ケルコトヲ許サ

ス(第二十一條)

(イ) 施行期日及経過規定

本令ハ大正八年四月一日ヨリ之ヲ施行シ
現在ノ高等學校ハ爾後之ヲ本令ニ依ル高
等學校ニ改ムルモ現ニ存スル大學豫科ハ
大正十年八月三十一日マテ之ヲ存置ス(附
則)

其ノ他高等學校ノ教員ノ資格及監督方法等
ニ關シ必要ナル規定ヲ設ク

本令ノ骨子ハ高等學校ヲ以テ其ノ本旨ニ於

テ最高普通教育ノ學府タルモノト爲スニ在
リ而シテ其ノ卒業ヲ以テ大學ニ進入スルノ
資格ト爲スハ大學教育カ完全ナル普通教育
ヲ以テ基礎トセサルヘカラサルニ因ルナリ
是レ現行高等學校令ト相一致セズ高等中學
校令ト其ノ軌ヲ同シクスル所ニシテ畢竟高
等學校ニ於テ完成セル一體ノ教育ヲ授ケム
トスルノ趣旨ニ出ツ而シテ中學校第四學
年ヨリ高等學校高等科ニ接續セシメ
因リテ以テ大學卒業ニ至ル年限ニ一

年ノ短縮ヲ求サムトス是レ高等中學
校令ト同一ノ趣旨ニ出ツルモノニシテ唯
其ノ方法ヲ異ニスルノミ尚高等中學
校ハ之ヲ官立ニ限り且其ノ數ヲ全回
通シテ二十校以内ト定メタルモ高等學
校ハ官立ノ外公立私立ヲ認メ且其ノ
數ヲ限定セサルコト亦注意スヘキ所
ナリトス

以上ノ二案件ハ慎重詳密討議ヲ盡シテ
審査ヲ遂ケ其ノ大體ノ趣旨ニ於テ事

宜ニ合シ時要ニ適シ大學教育及高等
普通教育ノ根柢タル允當ノ立案ナリト
認ム然レトモ其ノ條項ニ就キ仔細ニ之ヲ
詮議スルニ於テハ間相當ノ修正ヲ施スヲ
可トスヘキモノナキニテラス委員會ニ於テ
反覆査覈ノ結果修正ヲ議決シタル條項及理
由左ノ如シ

第一 大學令ノ修正條項

(一) 原案第一條ノ修正

大學ハ國家ニ須要ナル學術ヲ教授シ其ノ

蘊奧ヲ攻究スルヲ以テ目的トスルモ其ノ
教授及攻究ハ學術ノ理論又ハ應用ニ偏セ
ス両ツナカラ全キヲ期セサルヘカラス是
レ本條中ニ理論及應用レノ文字ヲ加フル所
以ナリ

大學ハ最高ノ學府ニシテ學術ノ教授及攻
究ヲ以テ其ノ存在ノ意義ト為スト雖又學
生ノ精神教育ヲ忽諸ニ附スヘカラサルコ
ト固ヨリ論ヲ俟タズ須ク其ノ本来ノ目的
ニ兼テ渾ク人格ノ陶冶及國家思想ノ涵

養ニ留意セサルハカラス是レ實ニ當今ノ
時要ニ屬ス本條ヲ修正シテ特ニ其ノ旨意
ヲ宣明スル所以此ニ存ス

(二) 原案第二條ノ修正

綜合大學ヲ構成スル部門ノ單位ヲ分科大
學ト稱スルコトハ帝國大學今年來ノ成規
ニシテ本令亦因襲スル所ニ係ル今俄ニ之
ヲ變改スルハ多年ノ歴史ニ顧ミ外間影響
ノ何如ヲ慮リ懸念スルキ餘地ナキニテ
ト雖其ノ名稱必スレトモ妥當ナラサルニ似

十一

タリ蓋シ大學ノ中更ニ數個ノ大學アリト
為スハ異物同名ノ奇態ヲ呈スルノミナラ
ス之ヲ帝國大學ノ實情ニ照ラスニ分科大
學ト文科大學ト同音ナルカ為處務ノ便宜
ヲ缺クコト少カラス又動モスレハ各部門
割據ノ弊ヲ誘致シ惹テ綜合大學ノ本義ヲ
徹底スルニ於テ遺憾ナシトセス其ノ利害
得失ヲ周密考查シタル結果遂ニ今ニ於テ
之ヲ改ムルヲ勝レリトスルノ結論ニ歸著
シタリ是レ分科大学ノ稱ヲ改メテ學部ト

為ス理由ナリ

單科大學ハ素ヨリ常體ニ非ス之ヲ認ムル
ハ特別ノ必要アル場合ニ限ル原案ノ趣旨
亦此ニ在リト云フモ意到リテ筆到ヲサレ
ノ感アリ第一項但書ノ修正ハ字句ヲ補足
シテ意義ヲ明晰ナラシムルニ外ナラサル
ナリ

原案分科大學ノ種別ハ現ニ帝國大學ニ存
スルモノニ就キテ之ヲ例示シ結フニ等
一字ヲ以テス是レ將來之ト異ナル分科大

學ノ設置ニ備ヘムカ為ナリト云フ然レト

モ大學ハ最高ノ學府ニシテ其ノ構成嚴格
ナラサルヘカラス異種多様ノ分科大學ノ
現出ヲ無限ニ認ムルカ如キ結果ヲ生スルハ穩當
ナリト云フヘカラス唯茲ニ全然分科大學ノ種別
ヲ限定スルニ於テハ近ノ其ノ例ヲ生スヘキ經濟科
及商科ヲ追加セサルヘカラス而シテ其ノ列記
ノ順序ニ至リテハ舊來ノモノハ前例ニ從
ヒ新ナルモノハ之ヲ後ニスルヲ可トスヘ
シ第二項ノ修正ハ此ノ理由ニ出ツ

以上ノ修正ヲ以テ學部ノ種別ヲ限定シタ
ル主眼ハ將來本令ヲ改正セサル限り別種
新奇ノ學部ヲ設クルコトヲ認メサルニ在
リ唯本令所定ノ學部ニ屬スヘキ學科ヲ併
合又ハ分割シテ稍別趣ノ學部ヲ設クルコ
トハ特別ノ必要アルトキ且其ノ實質及規
模カ各一學部ヲ構成スルニ適スルトキハ
之ヲ許スモ別ニ支障ナシ是レ更ニ本條第
三項ヲ追加スル所以ナリ

(三) 原案第三條第二項ノ修正

原案綜合大學ニ於テハ研究科ヲ綜合シテ
大學院トスルヲ一律ノ成規ト為スモ官立
大學ノミナラス公立私立ノ大學ニモ通ス
ル一般規程トシテハ寧ロ之ヲ大學院トス
ルヲ得ルコトニ止メ各大學ヲシテ採擇ノ
便ヲ有セシムルヲ可トス而シテ研究科ヲ
綜合シテ大學院トスルハ各科ノ聯絡協調
ヲ期スルノ目的ニ出テ且大學院トスト云
フハ單純ナル稱呼ニ非スシテ各科間聯絡
協調ノ實ヲ舉クルニ適切ナル組織及管理

ヲ具ヘタル一施設ヲ作ルノ謂ナルコトヲ
明ニスルヲ以テ妥當ナリトス是レ本條項
修正ノ理由ナリ

(四) 原案第四條ノ修正

原案ハ大學ヲ官立公立又ハ私立トシテ平
等駢記スト雖大學ノ設立ハ其ノ設備
及維持ニ照ラシ固ヨリ容易ノ業ニ非
サルカ故ニ宜シク國家自ラ之カ責務ヲ擔
任スヘシ蓋シ本邦從前大學ヲ官立ニ限リ
タルハ此ノ理義ニ因由ス然レトモ

隨時必要ニ誓ヘテ公立私立ノ大學ヲ認ム
ルコト亦必スシモ不可ナリト為サス是レ
今次學制ノ改革ニ當リ始メテ公立私立ノ
大學ヲ許サントスルノ要旨タルヘシ而シ
テ之ヲ認許スルハ固ヨリ本令ノ規定ニ依
準スルモノナラサルヘカラス本條ノ修正
ハ一ニ以上ノ趣旨ヲ表明セムトスルニ出
ツ

(五) 原案第六條ノ修正

原案私立大學ヲ財團法人ノ設立ニ限ルハ

大學ノ基礎ヲ鞏固ナラシムトスルノ趣
旨ニ於テ甚々可ナリ唯原案ノ規定ニ依レ
ハ大學ハ常ニ或ル財團法人ノ經營スル事
業タルヘキモノトス若シ其ノ法人ノ目的
ニシテ專ラ該大學ノ經營ノミニ止マルト
キハ法人ニ兼業ナキカ故ニ兼業ノ為大學
ノ基礎ヲ薄弱ナラシムルノ虞ナキコト勿
論ナリト雖若シ法人ノ目的カ大學ノ經營
以外ノ事項ニ互ラムカ其ノ範圍廣キニ從
テ或ハ累ラ大學ノ事業ニ及ホシ惹テ其ノ

基礎ヲ薄弱ナラシムルノ惧ナシトセサル
ナリ此ノ憂ヲ艾除スルニハ大學即チ法人
タルヲ以テ本則トシ法人ノ目的ハ一ニ大
學ノ經營ニ限ルノ趣旨ヲ明瞭ナラシメサ
ルヘカラス然レトモ或ル財團法人カ其ノ
事業トシテ大學ヲ經營スルノ途ヲ全ク閉
ツルニ於テハ或ハ拘束ニ過クルノ嫌アラ
ム唯廣ク其ノ道ヲ開カハ又前叙ノ害アル
カ故ニ法人カ其ノ目的ヲ學校經營ノミニ
限リ別種ノ事業ヲ兼營スルモノニ非サル

場合ニ於テ右ノ疏通ヲ認め尚之ヲ特別ノ
必要アル場合ニ限ラハ以テ事ノ宜シキニ
適スルヲ得ヘシ本條第一項ヲ修正シテ本
文及但書ヲ分記スル所以一ニ此ニ存ス
私立大學ハ自ラ財團法人タルト他ノ財團
法人ノ經營ニ係ルトヲ問ハス大學ニ必要
ナル設備及基本財産ヲ有セサルヘカヲサ
ルコト言ヲ俟タス其ノ基本財産ノ總額及
種類ハ固ヨリ法令ニ制限スルコトナキモ
少クトモ大學ヲ維持スルニ足ルヘキ收入

ヲ生スル限度ノ額ハ之ヲ現金又ハ有價證
券トシ金庫ニ供託セシメ其ノ確實ヲ表明
セシムルヲ可トス原案亦此ノ趣旨ニ外ナ
ラスト云フモ本條第三項ノ字句ハ一切ノ
基本財産ヲ擧ケテ現金又ハ有價證券トシ
之ヲ供託セシメ其ノ以外ニ於テハ不動産
其ノ他何如ナル財産ヲモ基本財産トシテ
有スルコトヲ許ササルノ意ナルカノ疑ナ
キニアラス又其ノ有價證券ノ種類ヲ國債
證券ニ限ルハ狭キニ失スルノ嫌アリ是レ

本條第三項ノ修正アル所以ナリ

(六) 原案第七條ノ修正

原案公立私立ノ大學ノ設立廢止ニ付文部大臣ノ認可ヲ要スルハ當然ナリ唯一大學内ニ於ケル學部ノ設置廢止ハ其ノ實質ニ於テ一大學ノ設立廢止ト多ク選フ所ナキコトナキニアラス之ヲ目シテ單純ナル大學學則ノ變更ト為スハカラサルカ故ニ是レ亦大學ノ設立廢止ニ準セシムルヲ可トス而シテ大學及學部ノ存廢ハ大學タルノ

十七

地位ニ照ラシテ固ヨリ重要視スハキ所ナルカ故ニ總テ其ノ認可ハ文部大臣ニ於テ勅裁ヲ請フハキモノトスヘシ是レ本條第一項及第二項ヲ修正スル理由ナリ

(七) 原案第八條ノ修正

原案大學ノ入學資格ヲ定ムルニ當リ高等學校ノ出身者ニ對シ文科ト理科トニ從ヒテ之ヲ區別シ其ノ嚮フ所ヲ劃定セルハ多數ノ事例ニ適應スル所以ナルヘシト雖既ニ高等學校ノ本義ヲ以テ大學豫科ト為サ

ス高等普通教育ノ學府ト為スニ替ヘ制度
ノ上ニ於テハ廣ク門戸ヲ開放シ學科ノ區
別ニ拘ラス各自ノ志望スル所ニ從ヒ大學
ニ進入シ得ルモノト為スコト高等學校ノ
本義ヲ徹底スル所以ナリトス唯入學志望
者ノ員數カ收容定數ニ超過スル場合ニ於
テ入學資格者間ニ其ノ種別ニ依リ先後ノ
順位ヲ立ツルコト蓋シ已ムヲ得サル所ニ
シテ之ニ關スル規程ニ至リテハ文部大臣
ノ定ムル所ニ委ヌヘキナリ是レ本條ノ修

正アル所以ナリ

(八) 原案第十條ノ修正

原案研究科ノ入學資格ヲ定ムルニ當リ單
ニ一定年限學部ニ在學シタル者タルヲ以
テ足レリト為シ學部ニ在リテ試驗ニ合格
シ學士號ヲ有スル者タルヲ要セス其ノ他
別ニ相當學力ノ保障ヲ必要トセサルハ或
ハ失當ノ嫌ヲ免レサラムカ即チ一定年限
學部ニ在リタル者ト雖相當學力ヲ具ヘ當
該學部ニ於テ適當ト認めタルモノニ限リ

研究科ニ入ラシムルコトトスルヲ可トス
是レ本條ニ修正ヲ加フル所以ナリ

(九) 原案第十五條ノ修正

原案大學及大學豫科ノ學則ハ文部大臣ノ
認可ヲ受ケシムルコト固ヨリ當然ナルモ
大學ノ官公私立ヲ分テ該認可ヲ申請スル
者ヲ殊別規定スルハ徒ニ煩瑣ニ互リ却テ
意義ノ明晰ヲ缺クノ嫌アリ又原案學則ニ
付テハ認可ヲ留保シテ廣ク各大學ニ規定
ノ自由ヲ與フルノ感アルモ是レ決シテ法

令ニ別段ノ定ヲ為スコトヲ認メサルノ趣
旨ナルヘカラス各大學ハ法令ノ範圍内ニ
於テ學則ヲ制定スルノ餘地ヲ有スヘキノ
ニ是レ本條修正ノ理由ナリ

(十) 原案第十七條ノ削除

公立大學職員ノ旅費其ノ他ノ給與ニ関ス
ル事項ノ如キハ大學制度ノ基礎法規タル
本令ニ收ムヘキモノニ非ス寧ロ全然之ヲ
別個ノ規程ニ讓ルノ法制ノ體ヲ得ルニ若
カス是レ本條削除ノ理由ナリ

(十一) 原案第二十一條ノ削除

本條私立大學ニ對スル財務上ノ監督規定ハ事固ヨリ緊要ニ屬スルモ私立學校令中私立ノ中學校及專門學校ニ付同一ノ規定アルカ故ニ寧ロ其ノ規定ヲ改正シテ之ヲ私立大學ニ及ホスコト規定ノ整頓ヲ期スル所以ナリトス是レ本條削除ノ理由ナリ

(十二) 原案第二十二條ノ修正

原案本令ニ依ラサル學校ニ大學ノ名稱ヲ許ササルハ蓋シ當然ナリト雖既ニ陸軍大

學校及海軍大學校アリ又將來大學ノ稱ヲ有スル別種ノ官立學府ノ設ナキヲ保セサルヲ以テ少許ノ特例ヲ認メ勅令其人他勅定ヲ經タル規程ニ別段ノ定マル場合ヲ除外スルコト最モ妥當ノ措置ナリトス是レ本條修正ノ理由ナリ

(十三) 附則第二項ノ削除

原案帝國大學及其ノ豫科ハ之ヲ本令ニ依ル大學及其ノ豫科トスル旨ヲ規定ス是レ本令ト帝國大學トノ關係ヲ明瞭ナラシム

ル所以ナリト云フモ現ニ存スル帝國大學
ノミニ関スルト将来設立セラルハキ帝國
大學ニモ関スルトラ問ハス自今其ノ新大
學令ニ依ル官立大學ナルノ義ハ帝國大學
ニ関スル勅令ニ於テ明ナルハキモノナリ
是レ本項削除ノ理由ナリ
其ノ他字句及條項ヲ整理シタル廉アルモ此
ノ如キハ何レモ本令ノ實質ニ觸ルルモノニ
非サルナリ

第二 高等學校令ノ修正條項

(一) 原案第一條ノ修正

原案所謂精深ナル程度ニ於テノ意義必ス
シモ明瞭ナラス高等學校ハ學制上普通教
育ノ最高學府タルニ替ハ茲ニ高等普通教
育ヲ完成スルノ趣旨ヲ昭揭スルノ直截簡
明ナルニ若カサルナリ又道德教育ハ高等
普通教育ノ一部ヲ成スハキコト固ヨリ疑
ナキ所ナリト雖輒近風教ノ寢ク弛頹セム
トスル病弊アルニ顧ミ特ニ德育ノ振興ニ
カムハキコトヲ劈頭宣明シテ教育界ノ戒

慎ヲ促スコト肯綮ニ中レリト信ス是レ本
條ノ修正アル所以ナリ

(二) 原案第四條ノ修正

本條第一項修正ノ理由ハ大學令原案第六
條第一項ノ場合ニ同シ

私立高等學校ハ自ラ財團法人タルト他ノ
財團法人ノ經營ニ係ルトヲ問ハス高等學
校ニ必要ナル設備及基本財産ヲ有セサル
ハカラサルコト言フ俟タズ而シテ原案ハ
其ノ基本財産ノ額ヲ單ニ五十萬圓以上ト

二二

定メ一律ニ五十萬圓ヲ以テ必要額トシ之
ヲ超ユル額ハ各自ノ任意ニ屬スルモノト
為シタレトモ當該學校ノ實質及規模ノ何
如ニ照ラシ或ハ五十萬圓ヲ超ユル一定額
ヲ以テ其ノ必要額トセサルハカラサルコ
トアルハシ是レ本條第二項ヲ修正シ基本
財産ハ少クトモ高等學校ヲ維持スルニ足
ルヘキ收入ヲ生スル額ニシテ且五十萬圓
ヲ下ラサルヲ要スルコトト為シ實況ニ應
ジテ五十萬圓ヲ超ユル額ヲ必要額トスル

コトアルハキ旨ヲ明ニシタル所以ナリ
本條第三項修正ノ理由ハ大學令原案第六
條第三項ノ場合ニ同シ

(三) 原案第八條第二項ノ修正

高等學校專攻科ヲ卒リタル者ニ一定ノ稱
號ヲ用ウルコトヲ得シムルハ適切ノ處置
タルヘシト雖原案之ヲ「高等學校學士」ト為
スハ名稱必スシモ妥當ナリトスハカウヤ
ルニ似タリ寧ロ年來多少ノ慣用アル得業
士ノ稱呼ヲ因用スルヲ可トス

(四) 原案第九條第一項ノ修正

原案高等學校ニ豫科ヲ附置スルコトヲ得
シムルノ制ハ必スシモ失當ノ施為ニアラ
スト雖此ノ如キハ常例ト為スヘキニ非ス
シテ特別ノ必要アル場合ニ限り僅ニ之ヲ
許スヘキノ三條文ニ掲ケテ此ノ義ヲ明ニ
スルヲ可トス

(五) 原案第十七條及第二十條ノ削除

此ノ二條削除ノ理由ハ大學令原案第十七
條及第二十一條ノ場合ニ同シ

(六) 原案第二十一條ノ修正

本條修正ノ理由ハ大學令原案第二十二條ノ場合ニ同シ

尚大學令及高等學校令ニ通シ特ニ注意スヘキ事項アリ

第一 大學令第一條及高等學校令第一條ノ前記修正ハ德育ノ振興ハ諸般ノ學校ヲ通シテ當今ノ要務ナルヲ信シ特ニ其ノ趣旨ヲ宣明スルヲ至當ト認ムルニ由ルモノナルヲ以テ中學校其ノ他ノ學校ニ關スル規程ニ付テモ

相當ノ機會ニ於テ之ニ應當スル改正ヲ加フルヲ可トス

第二 大學令第二十條及高等學校令第十九條ノ規定ニ依リ文部大臣ハ公立私立ノ大學及高等學校ニ對シ報告ヲ徴シ檢閲ヲ行ヒ其ノ他監督上必要ナル命令ヲ為スコトヲ得而シテ萬一私立ノ大學又ハ高等學校カ此ノ命令ニ違反シタル場合ノ制裁ニ至リテハ何等規定スル所ナシ是レ或ハ法條ノ遺漏ト謂フヘク私立學校令中他ノ場合ニ付制裁ノ規定ヲ

存スルカ故ニ之ニ相當ノ改正ヲ加ヘテ右ノ
場合亦一定ノ制裁ヲ科スルノ制ヲ立ツルヲ
可トス

上叙諸點ノ修正等ニ付文部當局ニ於テ別ニ異
議ナキコトヲ確メタルハ本官等ノ深ク欣幸ト
スル所ナリ

今次學制ノ改正ニ伴ヒ之カ實施ノ任ニ膺ル政
府當局ニ對シ特ニ本官等ノ希望ニ堪ヘサレ事
項アリ今其ノ重要ナルモノ數件ヲ列擧スルコ
ト左ノ如シ

第一 德育ニ尚數層ノ努力ヲ盡スコト

方今ノ教育ハ智育ニ偏スルノ傾向アリ之カ
為德育ニ精到ヲ缺クコトアルハ一般識者ノ
認ムル所ナルカ如シ是レ臨時教育會議ノ報
告ニ徴シテモ明ニ之ヲ知ルヘク文部當局ノ
見ル所モ亦然リ本官等モ亦全ク同感ナリ而
シテ此ノ流弊ハ學校ノ階級愈高クシテ愈然
ルニ似タリ今回ノ御諮詢案ニ於テ表面此ノ
事ノ文字ヲ見サルモノ之ヲ忽諸ニ附スルニ
非スシテ他ノ方面ヨリ種々ノ手段ヲ盡シテ

改善ヲ謀ラムトスルノ意ナリト云フ本官等
ハ以為ラク教育ノ各階ヲ通シ德育ノ方面ニ
向テ更ニ數層ノ努力ヲ盡スハ寔ニ當今ノ時
要ニシテ此ノ方針ヲ教育ノ基礎タル法令ノ
劈頭ニ宣明スルハ最モ事宜ニ適シタルモノ
ナリト是レ大學令第一條中ニモ高等學校令
第一條中ニモ之ニ關スル文字ヲ加ヘテ修正
シタル所以ナリ即チ臨時教育會議ノ着眼點
及文部當局ノ方針ヲシテ益完實セシメムト
欲スルノ意ニ外ナラサルナリ本官等ハ文部

當局ヲ始メトシ一切ノ文教管掌者カ此ノ方
針ニ對シテ爾今更ニ數層ノ銳意努力ヲ以テ
其ノ効果ヲ確實ニ擧ケムコトヲ希望シテ已
マサルナリ

二六

第二 德育ノ方法ニ改善ヲ加フルコト

徳性ノ涵養ハ師臨スル者ノ人格徳望ニ待ツ
コト多キハ論ヲ待タス之カ為優良ナル教育
ヲ得ムコトニカムハキコト亦論ヲ待タス之
ニ付テハ臨時教育會議ノ答申肯綮ニ中レリ
政府當局者ノ留意ヲ望マサルヲ得ヌ又德育

ノ趣旨ハ獨リ修身ノ項目ニ於テノミナラス
他ノ教科ニ於テモ常ニ茲ニ留意シ例ヘハ教
科書ニ於テモ此ノ意ヲ包含セシムヘキハ勿
論ニシテ文部當局ハ既ニ茲ニ見ル所アルヲ
信ス此ノ趣旨ヲシテ向來益進展セシムルコ
トヲ望マサルヲ得ス然レトモ仔細ニ考慮ス
レハ德育ノ手段方法ニ至リテハ此ノ他猶改
善進歩ノ餘地ナキニ非サルヲ信ス是レ大體
ニ於テ各階級ノ學校ヲ通シテ相同シキ所ナ
ルカ如シ然レトモ姑ク當面ノ問題ナル大學

及高等學校ノミニ付テ之ヲ言ハムニ例セハ
大學ニ在リテハ莊嚴ナル會同館ヲ設ケ紀律嚴
肅ノ間ニ於テ教員學生ノ集合ニ便ニシ以テ
徳教上ノ自然ノ感化ヲ受クルノ機會ヲ與フ
ルカ如キ又寄宿ノ寮舎ニ學生ヲ收容シ其ノ
他學生ノ平素ニ對シ誘掖ノ方法ヲ擴充シテ
放縱ニ流ルルノ弊ヲ防クカ如キ施設其ノ宜
シキヲ得ハ必ス其ノ效果アルヘキヲ信ス此
等ハ概ネ既ニ臨時教育會議ノ答申中ニモ具陳スル
所ニシテ當局者ノ一層深ク茲ニ留意セムコトヲ望ミ

ヲ得ス又高等學校以下普通教育ニ於ケル修身科ノ
教授時間ノ如キモ尚必スシモ衡量ノ餘地ナキニアラサルカ如
シ其ノ安排及利用ニ有更ニ研究ヲ重ク能フヘクム六
之ヲ増加スルカ如キモ亦德育ノ效果ヲ増スノ一法トシテ
考慮スヘキ所ナルヘシト信ス

第三 教課ノ負擔ヲシテ過重ニ失スルコトナカクモ且

其ノ内容ヲシテ一層實際ニ適切トラシムルコト
軌道教育界ノ流弊ト稱スルモノヲ考フルニ概ネ知識ヲ注
入スルニ急ニシテ自ラ智能ヲ啓發セシムルニ適切トラサルモ
ナルカ如シ其ノ必然ノ結果トシテ精神上ノ負擔ヲ過重ニ

シ却テ腦力ヲ減退セシメ其ノ害ノ及フ所寒
心ニ堪ヘサルモノアリト云フ本官等亦其ノ
感ヲ同シクセサルヲ得ス是レ蓋シ維新以來
先ツ智識ヲホムルニ急ナリシヨリ來レル所
少カラサルヘシト雖今日ニ至リテハ大ニ考
慮スル所ナカルヘカラス自今成ルヘク精神
上ノ負擔ヲ輕減シテ精力ヲ旺盛ナラシメカ
メテ各自ノ智能ノ發展ヲ助長スルノ方針ヲ
取ルヘシ又高等學校以下ノ學校ニ在リ
テハ卑近ナル事項ハ其ノ必要アルニ拘

ラス之ヲ開却シ反テ比較的不急ノ
高遠ナル理想的講究ニ走ルノ弊ア
ルニ似タリ且教育ノ方法動モ大レ
ハ形式ニ泥ミ活用ヲ缺クノ嫌ナキニ
アラヌ文部當局ニ於テモ既ニ此等
ノ實情ニ考慮スル所アリト聞クモ猶
十分ノ省察ヲ望マサルヲ得ス隨テ新高
等學校令ニ關スル學科課程ノ編纂ニ
方リテモ注意アラムコトヲ望ム

第四 七年制高等學校ノ模範的設置ヲ為スコ

ト

新制ニ依ル高等學校ハ高等科及尋常科ヲ併
置シ七年制タルヲ以テ本則ト為ス蓋シ高等
學校ハ高等普通教育ヲ完成スル所ナルヲ以
テ尋常小學校卒業後通シテ七年間一貫セル
教育ヲ施スハ頗ル有效剴切ナルモノアルハ
シ今俄ニ之ヲ普及セシムルコトハ得テ望ム
ハカラスト雖政府ハ成ルヘク速ニ若干ノ七
年制高等學校ヲ設立シテ其ノ模範ヲ示スヲ

可トス而シテ七年制高等學校ニ在リテハ尋
常科ニ於テ課スルキ外國語ヲ英語ニ限ラズ
各自ノ志望ニ從ヒ獨語又ハ佛語ヲ修メ得ル
ノ設備ヲ為サムコトヲ望ム

第五 高等學校專攻科ヲ設置スルコト
今回ノ學制改正ノ理想トスル所ヲ見ルニ高
等學校ハ高等普通教育ノ完成ヲ以テ目的ト
シ之ニ因リテ一面ニハ大學ノ收容力ニ過ク
ル學生ヲシテ其ノ方向ニ迷ハシムルノ弊ヲ
防キ一面ニハ地方紳士ヲ造出シ地方公共事

務等ニ當ルヘキ人物ヲ得山トスルニ在リ高
等學校ニ專攻科ヲ置カントスルモ此ノ趣旨
ノ效果ヲ一層良好ナラシメ山トスルニ在ル
コト臨時教育會議ノ報告ニモ詳述アリ苟ク
モ專攻科設置ノ理想茲ニ在ル以上ハ成ルヘ
ク其ノ奏效ヲ期シ當局者ニ於テ其ノ設置ニ
カメラレムコトヲ望ム

第六 教育ニ關スル高等諮問機關ヲ常置スル
コト

今回制定ニ係ル學制令ノ實施ニ當リテハ必

スヤ幾多重要ナル事案ニ逢著スヘシ例ハハ
單科大学ヲ認め私立大学ヲ許スカ如キ當面
ノ情勢ニ於テ誠ニ已ムヲ得サルモノアリト
雖若シ一タヒ之カ濫設ノ端ヲ啓カムカ其ノ
弊真ニ憂フヘキモノ存ス既ニ公立私立ノ大
學ノ存廢ハ一ニ勅裁ヲ經ルノ規定アルモ文
部當局ハ勅裁ヲ請フノ準備トシテ最モ慎重
ナル審査ヲ遂ケ苟クモ法令ノ運用ヲ謬ラサ
ルコトヲ念トスヘシ即チ教育ニ關スル諮問
機關ヲ常置シ有識ノ人士ヲ以テ之ヲ組織シ

重要案件ニ付テハ其ノ議決ヲ以テ當局ノ他
為ニ資スルノ制ヲ立ツルコト最モ必要ノ措
置ナリト認ム

第七 既設諸學校ノ改善ヲ怠ラサルコト

學校ヲ増加シテ須用ニ應スルハ固ヨリ希望
スル所ナリ然レトモ之ト同時ニ既設諸學校
ノ内容ノ不備ヲ充足スルコト亦甚ク重要ナ
リ隨テ是レ亦切ニ當局ノ深甚ナル考慮アラ
ムコトヲ希望ス

前來敘説シタル委員會ノ決議ハ修正ノ一二ニ

付多數ニ依リタル場合ヲ除クノ外總テ全會一
致ヲ以テ成立シタルモノナリ
右審査ノ經過及結果ヲ報告ス

大正七年十一月二十二日

審査委員長

樞密顧問官子爵末松 謙澄

審査委員

樞密顧問官男爵濱尾 新

樞密顧問官 小松原英太郎

樞密顧問官男爵穂積 陳重

三二

樞密顧問官 安廣伴一郎

樞密顧問官子爵岡部 長職

樞密顧問官 一木喜徳郎

樞密顧問官男爵久保田 讓

樞密顧問官 富井 政章

樞密院議長公爵山縣有朋殿

大正七年十二月二十日

書記官長



主筆 書記官



書記官



日伊通商暫定取極ニ關スル公文交換件
審査報告

謹テ今回御諮詢、日伊通商暫定取極ニ關スル公文
交換ノ件ヲ審査スルニ現行日伊通商航海條約ハ既ニ